全教 枚方教育

全教・枚方教職員組合
枚方市西禁野 1-1-3
No.１９７３
2025. 2. 20.
TEL 848-3300
Fax 848-3052
組合ホームページ

2／1青年フェスタ&TANE IN 大阪　　枚方からも多くの若い先生が参加

土佐先生の話(作文教育)に
「ムッチャ感動、みんな聞いた方がいいですよ」
何森先生の話(算数教育)に
「今までと全然違う、こんな授業があるんだ」

2月1日(土)、2日(日)に、例年開催されている大教組の青年フェスタと、全教の全国青年教職員交流会が共催で開催され、多彩な講師陣による教育講座や、若い先生同士の実践交流会などに全国や近畿の近隣の若い先生たちが参加。開会行事には会場に入りきれないほどの人が集まり、立ち見の人もでるほどで、若い先生たちの熱気が感じられる集まりになりました。

「ムッチャ感動、みんな聞いた方がいいですよ」

「今までと全然違う、こんな授業があるんだ」

枚方からも、あちこちの学校から若い先生や講師の先生が参加して、学校や教育委員会の研修などでは聞けないような教育の話に感激。教師として仕事への向き合い方、授業への考え方に大きなヒント変化をもらえたと、対好評でした。

土佐いく子さんの講座に参加した、若い先生は、担当教科とは違うけれども、「子どもを見る目」や「教育への考え方」にすごく感激、「あの話はヤバいですよ」「みんな聞いた方がいいですよ」とその思いを表現されていました。「土佐先生の話を聞いてから、学校の仕事が面白く献じられるようになりました」とも語っていました。

算数講座の何森先生の話を聞いた小学校の先生も、「授業のやり方や、指導の仕方でこんな方法があるんだ」と今までの授業のやり方との違いや、子どものとらえ方を把握しながら、つまずきにどうアプローチしていけばいいのか、具体的な指導や授業・教材の話にすごく新鮮に思えたと話していました。

全体講演　鈴木大裕さん「教育の本質を見つめなおそう」

2日目の全体講演会では、教育研究者の鈴木大裕さんのお話。昨年「崩壊する日本の公教育」を出版。安倍首相や、大阪維新の会の「教育改革」の実態や本質を鋭く解明して、的確な批判を展開されています。

現在進められている「新しい授業の在り方」「GIGA スクール構想」「学校の働き方改革」の実態や本質にもメスをいれて、先生たちが疲弊させられながら、本来の先生としての喜びを感じられなくされているかをわかりやすくお話していただけました。

2／15(土)「知りたい、聞きたい、しゃべりたい」
若い先生、講師の先生交流会(枚方)

2月15日(土)には枚方教組で、若い先生、講師の先生の交流会を開催しました。
忙しい中で、講師の先生、若い先生が集まり、学校での仕事や授業、子どもたちへの向き合い方についても、自分の学校や日常の仕事との様子を交流し合いました。

年度末の時期でもあり、次の仕事への不安や、それに向けての準備などにも話題が及んだり、仕事や子どもへの対応、授業でどうしたらいいかなど、悩みながら取り組んでいる思いも出し合えました。

先輩の先生からも、「あどじゃん」や「カードゲーム」などちょっとした工夫で、子ども同士が交流したり、理解し合えるアイデアを聞いたり、それぞれの経験から、子どもたちの思いや自主性を引き出す実践の話を聞くこともできました。

あなたも枚方教組へ

1. 大事なことを「知らなかった」、どうしていか「わからなかった」をなくし、つながること、交流することで大きな力に

2. 労働条件、教育条件改善の取り組みを
教員不足、過密多忙な働き方を対市交渉などで市教委に改善を要求、実現してきたこともたくさん

3. 教育講座、まなび庵、教育の在り方や実践をまなべます
子どもたちが笑顔になり、真剣に授業に取り組めるような実践、教材交流など、たくさんの講座やまなび庵を実施

4. 子育て組合員も参加しやすい集まりを工夫
会議や集まりに保育の工夫をしたり、子連れで参加できる交流会を企画

5. 講師の先生の声も取り上げ、重要な情報を積極的に届ける
たくさんの講師の先生の声も大切にして、市教委に改善を求めて、たくさんのことを実現してきました。

組合加入QRコード こちらからでも加入できます。

全教（全日本教職員組合）の枚方教職員組合のニュースです　枚方教組に加入して学校や働き方を変えていきましょう

NHK：Dear にっぽん「もういちど学校」、映画「小学校～それは小さな社会」

本来の教育のいとなみ、目の前の子どもから出発して、先生たちどうしが話し合って、手探りで取り組み

NHK：Dear にっぽん「もういちど学校」 先生たちが手探りでいちから・・

大分県玖珠町にある「くす若草小中学校」は、文科省の不登校特例校として、不登校や学校への行き渋りを経験した子どもたちが通う学校。校則や宿題、決まった行事がなく、生徒一人ひとりのペースを大切にしながら新しい学校の形を模索しているのが特徴です。授業や学校生活も、決まったカリキュラムがあるわけではなく、生徒の興味や意欲を尊重しながら柔軟に組み立てられています。

在籍児童生徒は22人、教員は10人。授業や教育活動はすべて先生たちが、子どもの様子を出し合いながら、どんな授業や取り組みがよいか、子どもたちが今どんな課題に直面しているのか、先を見通しながらも今この時点でどんな力をつけ、教員として向き合っていくかを絶えず先生どうしで意見を出し合いながら、手探りで取り組んでいます。

映画：「小学校～それは小さな社会」 先生どうしでどんな教育かを論議

12月に「枚方教育」でも紹介した「小学校～それは小さな社会」（アカデミー賞に現在ノミネート）でも、似たようなシーンが。

宿泊行事の就寝指導で子どもたちが寝静まった後に、廊下で先生たちが「おれたち、本当に子どもたちに力をつけられたんだろうか」「子どもたちに本当に必要な力って何なんだろうか」と苦悩を含めて自然に話し合う姿が取り上げられています。

欧米諸国では先生たちが宿泊行事で、就寝指導をすることはなく、り、先生どうしで教育論議をすることが珍しいうえ、先生たちが集まる職員室そのものがないとされます。

先生たちはそれぞれが自由な一方で、教職員どうしの論議で高めあったり、授業や教材、実践を見せ合って自主的に高めあう文化が日本のようには広まっていないとされます。

すべての学校・先生に、指導要領の過重な学習負担、拘束こそ見直すべき
必要なのは、自分たちが考えや工夫が生かされ、子どもたちの変化が実感でき、周りの人との支えあえる協力関係

上記のような先生たちの自主的で、積極的、創造的な取り組みが発揮できるためには、限界を越える学習の多さや、ねばならない拘束性、委員会からの具体的な教育活動への指示、拘束こそ見直すべきです。

さらに、現在では先生どうしの自発的・自主的な学び合いだった研究授業、校内研究も教育委員会からの「授業改善策、資質向上策」に完全に組み込まれ、「上から決められた」資質能力をいかに身につけさせるか、どもまで決められた目標を達成させられるかに駆り立てられかねない懸念もあります。

教員不足や過密多忙な働き方が大きな問題となっている学校、先生たちにとっては、本当は自分たちの考えや工夫が生かされ、子どもたちの変化が実感でき、職場でそれぞれの個性や特徴を認め合いながら支えあえる協力関係ではないでしょうか。

先生たちは、決められた目標、資質能力、授業方法の具体化をするため、個人の時間や健康も犠牲にして働くことに生きがいを感じられるのでしょうか？

自分で自由に工夫して、手ごたえのある授業や取り組みを、本当は望んでいるのではないでしょうか？

AI 開発加速、世界で投資競争
その先には はてしない「底辺への競争」？

強調されてきた 「AI の進化、普及で大多数の人の仕事が失われていく」

かつて AI 開発とその影響を取り上げた NHK の番組（2018 年 NHK「マネー・ワールド～資本主義の未来～」）で、クリエイティブな仕事以外は多くの人々が職を失うという恐れ、不安に対して、爆笑問題の田中氏が

- 「みんながみんなクリエイティブなことが出来るわけじゃない、工場労働のように決まったルーティンワークが得意な人はどうすれば？？」と問題を投げかけていました。

孫正義氏 「AI 開発で多豊かな暮らしが実現」「積極的にとらえれば、結果は違う」

番組中でソフトバンクグループの孫正義氏は次のように発言して、テック企業の立場からの楽観論を展開。

- 「そんなに不安がらず、前向きにクリエイティブな AI に出来ない仕事を目指そう！」
- 「常に進化していく世の中を悲しいと思うか、楽しい、チャンス到来と思うかで結果は全然違うと思います」
- 「かつてローマ帝国が富を得て、つらい仕事を召使いにやらせて、ローマ市民は芸術などの豊かな文化を築いた。今度は AI ロボットにつらい仕事を任せれば人間はより人間らしい豊かな文化を築けるはず。」

新井紀子氏 「失業不安に対して無責任。企業が税負担で支える覚悟があるのか？」

それに対して AI の「限界」にも言及してきた国立情報学研究所の新井紀子教授は、

- 「資本家が実際に仕事を奪われる人に対して、『それは気持ちの持ちようだ』とか『もっと気持ちを明るく持って何とかしたらどうなのか』と言うのは私は無責任だと思う」

また、「AI 弱者」への救済措置として議論されているベーシックインカム（全国民への最低限の生活保障制度）について、その財源とし法人税の引き上げといった資本家側の負担が求められていることについて、新井氏は孫正義氏に対し、法人税引き上げには賛成なのかと迫ると、孫氏はしばらく絶句する状態に。

さらに彼女に、「法人税を上げて、それでベーシックインカムを支えてくださるんですか」 と追い打ちをかけられ、孫氏はしぶしぶ「法人税は必要ですよね」 としぶしぶ答えざるを得ませんでした。

大企業、AI 企業にとっての明るい未来、犠牲になり切り捨てられる人々は・・・・

孫正義は、トランプ大統領就任２日目の１月 21 日に、石破首相よりいち早くホワイトハウスに駆けつけて、AI 開発に 78 兆円投資を表明していました。

目前の企業利益をめぐる動きに機敏に反応して行動する、企業家としてのとびぬけた特性です。

アメリカも日本も、政府や企業がどこよりも早く、最先端のテクノロジーを開発して有利な地位を得ようと、そのための大企業への減税、優遇策を打ち出し、その一方で、社会保障や企業への社会的規制を次々切り下げていく。こんな動きが強まっていることも事実です。

「トリクルダウンはおこらなかった」のに、また企業利益優先の「底辺への競争」に？

安倍元首相はアベノミクスを推進し「大企業が利益をあげれば賃金が上がり、雇用が増える」とトリクルダウン（滴り落ちる）の政策を強調したものの、結果は世界で日本だけ賃金が上がらない一人負け状態に、岸田前首相も「日本企業は競争力を失う一方、・・この30年間、企業収益が伸びても、期待されたほどに賃金は伸びず、想定されたトリクルダウンは起きなかった」と言及。なのに現在の国会では世代間対立をあおり、現役世代の支持をもてあそぶように、「年収の壁」「教育無償化」とセットで社会保障の削減が一層強められようとしています。

このままでは、企業の成長を優先する政府が、企業減税を拡大する一方で社会保障、労働条件切り下げを果てしなく進める「底辺への競争」になることは明らかです。